

## 甲状腺外科草子 80

### 清少納言の系譜：快男児 橘則光

杉野 圭三

橘則光は清少納言(964-970年-1025頃)の夫として知られ、枕草子にも描かれた人物である。



橘則光 (965? - 1021 以後?)

今昔物語に則光の武勇伝が描かれている。

「今は昔、陸奥前司橘則光といふ人ありけり。兵の家にあらねども、心極めて太くて思量賢く、身の力なども極めて強かりける。みめなどもよく、世の思えなどもありければ、人に所おかれてぞありける。然るに、その人未だ若ける時、前一条院天皇の御代に衛府の蔵人にてありけるに、内の宿直所より忍びて女の許へ行きけるに〜以下略」

要約すると、当直の夜に女の許に行ったところ、三人の強盗に遭遇、切り殺してしまった。勤務中なので、こっそり戻り従者にも口止めた顛末である。剛胆、思慮深く、剛力、美男、世評も良く、高く評価されている。

枕草子第八七段に則光が登場する。

頭の中將の、漫(そぞろ)なる空言を聞きて、いみじう、言ひ貶(おと)し、「何しに、人と思ひけむ」など殿上にても、いみじくなむ宣(のたま)う、一中略一、頭の中將(藤原齊信(967-1035): 賢才を謳われた四納言の一人)は清少納言に関する嘘を信じて、仲違いしていた。その時に清少納言のもとに手紙が来る。手紙には「蘭省の花の時、錦帳の下」と書かれ、漢詩の末の部分を書いてくださいとあった。そこで正しい末の句「廬山の雨の夜、草庵の中」の代わりに「草の庵を誰か訪ねむ」と書いて送った。この機転のきいた切り返しが大評判となり、則光が訪ねてくる。

いみじき慶び、申しに「上にや(中宮様の側かど)」とて参りたりつる。いで、真に嬉しき事の昨夜侍りしを、心許無く、思ひ明かしてなむ。斯(か)ばかり、面目有る事、無かりき。則光は清少納言の大評判を聞き、素直に大喜びし、好人物として描かれている。

八九段では清少納言は宮中の問題(?)に巻き込まれ、一時宿下がりをしていた時期がある(詳細略)。この時、皆心配して清少納言を探し回り、則光は藤原齊信から居場所を教えるように迫られ、困って傍のワカメを食べまくって誤魔化した。しかし、次にまた居所を白状するように迫られ、清少納言に相談するが、絶対に教えるなど釘をさされワカメを贈られた。この意味が理解できない則光の鈍感さにあきれ、清少納言は「潜(かつ)きする海人(あま)の住み家は其処なりとゆめ言ふなとや和布(め)を食わせけむ」と書いて見せた。則光は「歌は分からないので見ない、私を思うなら歌を寄こさないでくれ、別れるのなら歌を寄こしなさい」と返した。

そこで、「崩れ寄る妹背の山の仲なれば更に吉野の川とだに見じ」と遣った後、本当に交際は途絶え、則光は遠江国の介として赴任した。則光が陸奥守として赴任する時の歌が一つだけ残る(あれほど嫌いだったのに意外!)

われ獨(ひとり) いそぐと思ひし東路(あづまぢ)に垣根の海はさきだちにけり

(金葉和歌集 第六卷 別離歌) 橘則光朝臣

武人の素養がある則光は庶民と感覚のずれた宮中の退廃的生活が性に合わず、歌が嫌いだったのかもしれない。清少納言は「鈍感!」と言いつつも好意的に表現していると感じる。才女である清少納言との「出会い」が気になる。則光は「後朝の文」を送ったのかな?

参考資料: 今昔物語(佐藤謙三校注、角川文庫)、枕草子(島内裕子校訂・訳、ちくま学芸文庫)、Wikipedia。

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2023年11月1日